

習していくと考えられる。このことが、前回までの初産と経産の比較研究で明らかになった生後1カ月の時期に初産の母親と経産の母親の行動に大きな違いが見られたことと対応していると考えられる。

以上の結果を含めて、昭和63年度の共同利用研究では、4才までの個体史を把握した個体の追跡を継続し、コドモ期の社会関係の差が、ワカモノ期以降の社会関係にどのように影響するかを縦断的に明らかにしていきたい。

霧積山系中尾川流域における野生ニホンザルの分布及び猿害の実態に関する研究

岡野恒也(日本女子大・文)・小山高正
(東京女子大・一般教育)・上原貴夫
(上田女子短大)

中尾川は、群馬県碓氷郡松井田町子持山と中尾山にはさまれた狭隘部を流れる。川を遡れば長野県軽井沢町に達する。1988年8月、中尾川流域には主に2群が遊動する。カタハナ群15個体、プリンス群約40個体である。現在はこのように少数個体であるが、1986年秋ごろまでは、カタハナ群148、プリンス群約60、ワニ群約60個体が遊動していた。その後、山中に遊動する個体数が減少しはじめ、現在に至る。このような動向とともに、中尾川下流域に広がる集落、農地に出没する個体数の増加が見られる。これらの地域においては、1986年以前では、春から秋にかけての出没が見られ、これ以外の時期には出没しないという特徴が見られたが、現在では年間を通して出没し、同時に猿害も一年中発生しはじめている。この他に周辺には霧積川流域、妙義山系に多くの野生ザルが生息する。後者においてもやはり猿害が発生しているが、主にそれは妙義町、下仁田町である。松井田町での猿害には霧積川流域生息群も関係するが、中尾川上流域山中での個体数の大幅な減少と合わせ考えるならば、それまで同山中に遊動していた個体の多くが関与していることが考えられる。

これらの動向とともに猿害も次第に増大してきている。1986年ごろまでは春のクワ、シイタケ、ネギ、夏から秋にかけてのクリ、豆、カキに集中していたが、1987年秋には水田に入り込み、米に

対する被害の気配も見られる。時には小学生や老人等を威嚇することもあらわれてきた。群馬県林務部の調査によれば、昭和61年度の被害は1,200万円にのぼるが、実際には届出されない被害もあり、これ以上におよぶと考えられる。対策は、檻による捕獲、電気柵設置、スピーカーによる音声等から、時には銃による駆除へとかわってきている。有害鳥獣駆除の申請は、ほぼ年間を通して出されている。

現在、山中においても人に対する馴化が急速に進むとともに、山麓部への出没も季節にかかわらず、年間を通して出没する傾向の定着化が見られる。同時に、猿害による被害も拡大される傾向にある。

ザルの手に存在するパチニ小体の分布について

武田 創・熊本賢三(明治鍼灸大)

皮膚の感覚受容器の一つであるパチニ小体の分布を解剖組織学的に種々の動物を用いて研究してきた。日本ザル(*Macaca fuscata*)では、手の掌側の皮膚組織に約400個の小体が分布し、その大きさは長径約600 μm 、短径約300 μm であり、真皮よりも皮下組織に多くみられた。また、小体は手全体に分布していたが、指では特に末節指球に多く、手掌では母指球の第3指よりに多くみられ、指よりも手掌により多く見られた。今回は、ホルマリン固定されたコモンツパイ(*Tupaia glis*)の手に分布する本小体についてチョウセンシマリス(*Tamias sibiricus barberi*)のそれと比較して報告する。ツパイとシマリスの手は脱灰後、型どおりセロイジン包埋し、40 μm の連続横断切片にしてHE染色を施し、光顕にて検鏡した。また、標本は万能投影器にて拡大し、ボール紙を用いて手全体を再構築して小体の分布位置を確認した。結果：コモンツパイの手掌には4つの指間球と母指球及び小指球があり、全体としてシマリスの手を少し大きくしたものに近い。パチニ小体は皮膚組織のうち皮下組織にのみ認められ、真皮には見られなかった。また筋組織や骨、関節付近にも認められなかった。その数は10~16個で、母指球から母指基部に局在していた。シマリスでも同様に皮下組織にみられたが、指と指間球深